PROCEEDINGS 20 183-192
March 2012

親の社会関係資本が子どもに作用する経路
—2 人の中国人母親による事例を通して—

馬　　芳　芳
（人間発達科学専攻）

本研究は、「社会関係資本」（Social Capital）[1] という概念を援用して、親が所有しているこれらの資源がどのような経路を経て子どもに作用しているのか、また、これらの経路には、社会階層の異なる親の間に、どのような相違点がみられるのかを明らかにするものである。分析は、中国で実施した 2 人の母親に対する聞き取り調査をもとにして、その語りを比較しながら行う。

1. 問題関心

1.1. 社会関係資本に注目する理由

近年、子どもの教育達成過程において、「家族の機能が問われるような局面が増えている」といわれている（宮島 1999, p.112）。その一面には、家庭の所有する諸資源が、さまざまな制約あるいは自由を作り出していることがある。Coleman（1988 = 2006, p.223）は、これらの資源（家族的背景）を学校教育と区別する単一の実体として捉えるのではなく、その中身を分解する必要があると指摘した。本稿は、社会関係資本を親が所有する一資源として注目したい。

まず、社会関係資本の特徴を他の資本と区別することから説明しよう。Coleman（1990 = 2004, p.477）は、資本創出の視点から、物理的資本は素材から、人的資本は技能と才能から創出されるのに対し、社会関係資本は、人々の関係から創出されるものであると区別している。さらに、物理的資本と人的資本は比較的に可視的なものであるが、社会関係資本は目に見えないものであるとした。したがって、この概念に注目することによって、人間関係のなかには、存在するが、目に見えない資本の作用を検討することが可能であろう。一方、子どもの教育達成過程において、経済資本や文化資本（可視の部分）による作用が多くの先行研究から検証された [2] が、社会関係資本に関しては近年盛んになってきたものの、研究が十分に蓄積されたとはいいがたい [3]。

次に、社会関係資本に関する中国社会の実情を説明しよう。中国では、社会関係資本による社会階層の形成、社会移動のメカニズム解明に関する研究で、大きな成果をあげたのは自営業者の集団に注目したものであった（樊 2004）。樊によれば、自営業者のグループは、相対的に社会関係資本をもっとも必要とし、その重要性をもっとも認識しているという（pp.30-35）。それぞれの特徴をより鮮明に描き出すために、比較の視点を用いたところに、樊の研究は示唆に富むものであった。

よって、本稿では、家庭内外の人間関係を通じた経路を検討する際に、社会関係資本という概念を援用して、社会階層の異なる母親による事例を比較するのが有効であろう。

1.2. 質的アプローチを用いる理由

社会関係資本に関する議論の争点の 1 つとして、その方法論の問題が挙げられている。

坂田（2001）によれば、Coleman は、「社会関係資本はその定義から見えにくい資本であるから、直接それ自体を計測しその価値を計測することは困難である。そこで、多くの研究が間接的な指標を用いてその多寡を計測する手法をとることになる」（p.19）、といった点を指摘した。ところが、議論とは別に、実際の Coleman（1988 = 2006）の実証分析では、子どもが親から得る社会関係資本の測定として、単純に親子関係の強さで測定している。さらに、親子関係の強さは、単に親が存在しているかどうかで捉えている。そのため、これによる分析結果は十分な検証になっていない可能性も Coleman は認識している（pp.224-227）。

このように、計量的なアプローチに測定の困難があるのに対し、質的アプローチではどうなるだろう。Lin（2001 = 2008, p.36）は、社会関係資本には「定性的指標を用いる定性的分析にとっての有用性」があるという点を指摘した Coleman の言葉を記述している。つまり、概念そのものに質的な側面が強い。また質的アプローチは、「ある現象をそのままの状態で観察し、関係者とのインタビューを行い、ある活動に関連した文献や人物像を分析」し、このプロセスは発見志向的なものである（Merriam 1998 =

2004, p. ii)。したがって、質的アプローチを用いることによって、個々人の周囲に存在している社会関係資本をありのまま観察し、それを個別の出来事において分析することが可能である。これは冒頭で述べた研究目的と一致している。

加えて、質的なアプローチを用いるもう1つの強みは、個別の事例を取り上げて詳細に比較することにおいての有効性である。たとえば、志水（2010, p.228）は私学に子どもを通わせる親のなかでは、戦略的に私学を選んだ場合と親の見栄やライバル意識がその動機になる場合に違いがあることを例として挙げている。このような例を比較することで、その違いが生じた原因や結果を観察することが可能と考えられるからである。

以上の理由で、本稿は質的なアプローチを用いて、2人の母親から得られた事例を比較しながら、それぞれの特徴を観察していく。

2. 社会関係資本の獲得と使用

2.1. 社会関係資本の獲得源

本項では、社会関係資本研究に大きく貢献した最初の2人の研究者、Bourdieu と Coleman による定義を整理しながら、その獲得源について検討する。

まず、再生産の視点から出発する Bourdieu は、社会関係資本を個人・集団が所有する資本の一形態として捉えている。彼は、共通の特性をもっていて、永続的で役に立つ一集団への所属と密接に結びついている資力の総体を社会関係資本と定義している（Bourdieu 1980 = 1986, p.30）。したがって、Bourdieu の視点からは、同質の集団や人脈と接触することによって、社会関係資本の獲得が可能であろう。

Bourdieu に対して、Coleman（1988 = 2006）は社会関係資本の存在を家族内と家族外の両方に種別している。前者は、親子関係のなかで、両親が子どもの人生に関わる度合いを指す（pp.223-224）が、後者は、コミュニティのことを指す（p.227）。つまり、必ずしも Bourdieu の強調する同質集団の人脈でなくても、日常の親子、友人、近隣関係からも社会関係資本が生まれるという獲得経路が予想される。

2.2. 社会関係資本の使い方

本項では、社会関係資本が教育達成に使用される際に、有用な側面について検討する。

まずは、文化資本の議論を精緻化した Bourdieu は、社会関係資本の文化資本との転換を強調している。三隅（2009, p.717）の解釈を借りれば、それは、「上流階級との人脈形成がそこでの階級文化の習得を促し、それがまた人脈を広めるといった形」である。つまり、親と同質の人脈関係といった側面は、文化資本への転換を通して影響を発揮するのである。ここでの転換は、たとえば親の教育期待や学習を動機づける行動などが考えられる。

一方、最初に社会関係資本を教育達成（人的資本の形成）と直接結びつけて言及したのは Coleman である。Coleman（1988 = 2006）では、親子関係の強さ（＝親の有無）と親が子どもに気を配る程度（＝親の教育期待）を社会関係資本の指標として設定し、それが欠如する家庭ほど、子ども（高校生）の中退率が高い、という知見が出された。この点について、彼以降のさまざまな研究でも追認された。稲葉（2007, pp.97-98）はこれらの成果を紹介したほかに、母親自身の友人関係が子どものパフォーマンスに大きく影響する、という研究結果もレビューしている[4]。ここから、教育達成に良い影響をもたらすのは、家庭内部における良好な親子関係、あるいは、家族外部における親の良好な友人関係、といった側面であることが推測できる。

さらに、Coleman が提示したほかの議論は、上記のように直接教育と関わって検討されていないが、そこから間接的に教育達成に作用する可能性も有している。たとえば、Coleman（1990 = 2004, pp.478-490）は、社会関係資本の諸形態を6つの側面から考察している。そのなかには、「情報潜在的可能性」と「他の目的に充当される社会組織」がある[5]。前者はつまり、自分から直接アクセスすることが不可能、あるいは費用がかかる場合、社会関係（友人や同僚などとの交流）から情報を入手することが効率的であることを指す。子どもの教育において、学校選択の場面がそれに当てはまるだろう。具体的にいえば、子どものために進学先の学校を決める際に、実際学校に行かなく／行けなくても、経験のある友人や親同士から情報を収集し比較するのが有効であるというものである。

そして後者については、韓国過激派学生がもともと学習のために創設したサークルが、抗議活動のための組織としても機能するといった例が挙げられている。類似して、誰でも経験する「同窓会」のことを想起させる。同窓会の機能を社会的に考える研究である黄（2007）では、最近の中国で、エリート学校出身の人たちが仕事の役に立てるために同窓出身のネットワークを形成する傾向があることを紹介している。これを Coleman の議論と合わせてみると、すなわち、本来事業拡大を目的とした同窓会メンバーは、同じ子育て経験を有する親同士でもあるため、子どもの教育に関する情報交換やお互いの子どもを紹介する場面も十分ありうる。

以上では、社会関係資本の獲得源と使用を中心に、先行研究を検討しながら、本研究の目的に合わせて、親と関連

づけられる経路をいくつか提示した。これらの想定した可能性を念頭に置きながら、以降は具体的な事例から検討してみる。具体的には、①教育期待、②子どもを通塾させた理由、③学校選択、④子どもとの関わりといった項目に分ける。

3. 研究方法とデータの概要

3.1. 研究方法

本稿では、聞き取り調査から得られたデータをもとにして検討する。調査は、2011 年 9 月に中国浙江省慈渓市市内にある某大手学習塾で実施したものである。該当地域の特徴は、民営経済が非常に発達しており、80 年代以降の改革開放政策のもとで、学歴は決して高くないが、起業し成功した自営業者が多く集まっている点である。筆者は、修士論文でこの地域を事例研究として取り上げ、その後教育期待や学校外教育といったテーマで注目し続けてきた経緯がある。今回は、修士論文の資料収集の時に協力を得た学習塾の先生から紹介を受け、そこに子どもを通わせている母親 2 名を対象にした。以降は A さん、B さんと呼ぶ。

用いた調査方法は、半構造化面接法である。A さんに約 20 分、B さんに約 60 分の面接を行った。両方の対象者にかける時間の差が生じたのは、A さんは該当塾の職員でもあるため、仕事が入ったときにインタビューを中断せざるをえなかったからである。そのため、A さんに十分なデータを取れたわけではない。よって、最初の三項目は、2 人の比較を通して検討する。今回のデータで比較困難な一項目は B さん 1 人の語りで補うことにする。

3.2. データの概要

分析に入る前に、2 人の対象者について説明したい。

A さんは、38 歳、高専卒（高卒相当）で、現在学習塾で事務の仕事をしている。月収は約 3,000 元である。その配偶者も高専卒で、該当市の公務員であり、月収も約 3,000 元程度である。2 人合わせての家庭の世帯所得は毎月約 6,000 元となる。筆者がこれまで該当市を対象に収集してきた量的なデータによれば、この所得の数値は中間所得層と高所得層の境界線にある状態をイメージしてよい[6]。家族構成は、3 人家族で、現在 11 歳、小学校 4 年生の息子が 1 人いる。彼は小学校 1 年生から現在の塾に通い始めた。

一方、B さんは 47 歳で中卒の個人経営者である。配偶者は 50 歳で高卒、妻の B さんと同じ事業を経営している。一ヶ月で家庭の世帯所得は約 10 万元[7]にいたる。この数値は、上記 A さんの家庭と桁外れのものとなり、これまでの量的なデータにおいても高所得層のカテゴリーに入る。そして、家族構成については、4 人家族で、23 歳の長女 1 人と 12 歳の長男が 1 人いる。彼は現在小学校 6 年生であり、小学校 1 年生からの通塾経験を持っている。今回のインタビューで聞いた話はすべて長男に関するものである[8]。

次に、2 人の人生経験について説明する。A さんの実家は 4 人家族で、昔アパレル業を営んでいたことで、家庭全般の経済状況が良好であった。A さんは中卒後、一度高校受験に失敗したが、半年ほど実家の商売の手伝いをしていた。その後は浪人生になって、専門の予備校[9]で半年受験勉強してから、二度目の受験に成功した。なぜ二度とも受験したのかを尋ねると、それほど勉強が好きではなくて、ただ経済的な余裕があったからとの理由が語られた。そして、高専を卒業した後も実家の商売に関わり、その後は親戚のコネ（社会関係資本）で現在の仕事に転職した経緯がある。

それに対して、B さんは 5 人兄弟の 2 番目に生まれ、当時の実家は経済的な余裕がなかった。それゆえ、中卒後の高校受験に合格したものの、進学を断念せざるを得なかった。しかし、手に職をつけるために、技術を学んで自ら自営業を始めた。最初はアパレル業だったが、徐々に事業を拡大し、現在はサービス業を経営している。彼女は常に知識を求める意欲が高く、不定期に講習会を受けたりしている。そこから自分の人的資本を高め、事業拡大用の人脈（社会関係資本）も獲得した。また、昔の同級生（語りではのちに大学に進学した人たち）とコンタクトも取っており、同窓会（社会関係資本）などの形で交流をし続けてきた。つまり、B さんは、量も質も高い家族外の社会関係資本を所有していることが分かる。

上記の記述より、2 人の特徴は次の 5 点にまとめられる。①出身階層は、比較的に A さんのほうが高いが、教育アスピレーションの方は、どちらかというと B さんの方が高い。②出身階層に規定された制度化された文化資本（学歴）でも、B さんより A さんの方がやや高い。③しかし、本人のアスピレーションや能力によって蓄積した現在の経済資本は、B さんが A さんをはるかに超えている。④さらに、現在所有している社会関係資本も B さんの方が豊かである。なお、A さんがこれまで利用してきた社会関係資本は主に家族や親戚のコネ、いわゆる「強い紐帯」にあたるのに対し、B さんのそれはほとんど友人や仕事に関わる人間関係、いわゆる「弱い紐帯」との違いもある。⑤ただし、子どもへの学校外教育投資から見れば、両者とも熱心であるように見える。

4. 事例分析

前章では、2 人の対象者それぞれの特徴を述べながら、

その相違点を確認してきた。このような差異は、子どもと接触する際に、どのような経路を経て伝達されていくかを具体的な語りから検討する。傍点は読みやすくするために筆者がつけたものである。

4.1. 教育期待

教育期待とは、親が子どもに望む学歴のことを指す。量的研究の知見によれば、親の階層によって「タテの学歴」(教育年数）と「ヨコの学歴」（学校歴）のどちらにおいても意識が分かれる[10]。よって、以下では、「子どもに最終的にどの学校段階までに進学してほしいと思っていますか」というメインクエスチョン（MQ）をしてから、サブクエスチョン（SQ）として「重点（名門）大学に対する期待はいかがですか」を加えた時に、2人の対象者が語った話を比較する。

＜MQ＞
これ、考えたことないな。成り行きに任せているっていう感じですね。（中略）本当に考えていないです。考えてもしょうがないからさ。これは、本人のでき状況（受験の成績）によりますね。（Aさん）
＜SQ＞
言わなくてもみんな期待するものじゃないですか。まあ、一番の原因は、（中略）誰にでも「面子」（見栄）がほしいからです。しょうがないわ。しかし、とは言っても、子どもは、彼自身で能力を発揮していくしかないから、いくら干渉しても役に立たないと思う。こんな考え方（高く期待すること）、私にはあんまりないかな…（Aさん）

＜MQ＞
すくなくとも、大学までは行かせないとね。大学は必ず卒業しなければならないんですから。…その後（大学院）は、私はあまり無理させない。（中略）人が、知識を学ぶのはやっぱり大事だから（Bさん）
＜SQ＞
もちろん、絶対重点大学でしょう。うん、仮に国内の重点（名門）大学に合格すれば、それはもちろん一番望むことですよね。でも、もし受からなければ、うちは、ほかの選択をしたいと思います。（中略）留学をさせたいと思っています。子どもに外の世界を見てきてほしい（中略）私は行ったことないですが、周りの友だちからたくさん聞いていますね。（中略）物の見方や考え方など。ただの成績を求めるだけではないんですね。（Bさん）

ここで、①Aさんの語りに終始「しょうがない」、「しかたがない」といった曖昧な表現が見られる。一方、Bさんからは「必ず」、「絶対」が示すような非常に明確な期待が語られた。②また、期待の実現に向けて行動する主体について、Aさんはほとんど「本人のでき状況」や「彼自身で能力発揮」することにすべて任せており、主体は子どもである。しかし、Bさんの語りは「仮に…すれば…。もし…なければ…ほかの…したい」といった表現が特徴である。それは、自分の期待と反する結果についての予測をした上で、成功と失敗の両方に備えた対策までも視野に入っていることと理解してよいだろう。つまり、主体はBさん自身である。ここから、消極的に結果を待つAさんと積極的に行動するBさんというまったく正反対の人物像が描かれる。③もう1つ、重点大学を期待する理由について、Aさんの話では「面子」というキーワードが出てきた。すなわち、親自身の見栄がその動機となっている可能性がある。それに対し、Bさんには「知識を学ぶのが大事」、「外の世界を見てきてほしい」といった理由が挙げられ、つまり、子どもの将来を考えた上での戦略といえる。

このように、用意した選択肢から教育期待を選んでもらうなら、AさんとBさんに大きな違いは見られないだろうが、それを支える裏の思惑に両者の違いがはっきりある。教育期待を家族内における社会関係資本として捉えれば、明らかにAさんよりBさんの方がその所有量が豊富である。なお、Bさんがこのような意識をもつのは、「周りの友だち」、つまりBさんが持っている家族外の社会関係資本に由来していることにも留意してほしい。

4.2. 学習塾に通わせた理由

データ概要で紹介したように、2人の対象者には息子を小学校1年生から現在まで学習塾に通わせているという共通点がある。それは、一見両者とも積極的に教育投資をしているように見える。しかし、果たしてこの行動に対する2人の動機は同じだろうか。この点について、「学習塾に通わせた理由」に対するAさんとBさんの語りに注目し、確認したい。

毎日仕事が忙しいから、面倒を見る時間がないからですよ。なので、ここ（自分の職場）に連れてきたのです。（中略）小学校1年生から、月から金曜日まで毎日来ています。ほとんど宿題を中心にしています。（Aさん）
当時は、事業拡大の時期でもあったため、まったく（面倒を見る）時間がなかったですね。なので、最初（1年生）は住み込みコース（原語は「全托」）にしていました。夜もここ（塾）に泊まっていて、専門の先生

が面倒を見るから。（中略）でも今は夜８時まで勉強して、私が毎日迎えにきています。子どもがまだ小さいから、できるだけそばにいてあげたいですね。ただあの時は、本当に時間がなかったから。（B さん）

上記のように、両方の話では、「時間がない／なかった」といった事情が語られ、つまり２人とも直接子どもの面倒を見られないという困難に直面する／した経験がある。ただし、A さんにとってこの学習塾は自分の職場でもあるため、子どもはただ「連れてきた」だけである。すなわち、A さんは子どもに学力をつけさせる目的より、むしろ安心して子どもを預けることの必要性が強く見られる。一方、B さんの語りは異なる。B さんは、ほかのところ（家）より、塾では「専門の先生」が面倒を見てくれる、つまり、教育の質が保障されている面を重視していることが読み取れる。こうした意識を持っているのは、高学歴の親であることが一般的に指摘されているが、今回の事例からは支持されない[11]。

最後に、B さんの選択を可能にしたのは、豊かな経済資本である点も否定できない。

4.3. 学校選択

ここでいう学校選択は、高額な費用がかかる民営中学校（日本でいう私立学校に相当）の選択を指す。学校選択は、その意識が家族内の社会関係資本（親の教育期待や教育意識）に関わるものであるが、前述のように、行動レベルにおける情報収集などは家族外の社会関係資本（親同士や友人関係）が重要である。以下の分析では、「市内の民営中学校を受験させてみたいと思っていますか」というメインクエスチョンに対する２人の語りを比較し検討してみる。サブクエスチョンは、「高校の場合はどうですか」である。

＜ MQ ＞
それはもちろんさせてみたいですね。受かるかどうかは子ども次第ですが。（A さん）
＜ SQ ＞
高校も入試を受けなければならないので、（中略）そんなこと、予想できないから。本人がどれくらい点数をとれるかで決まることだから。うん、私たち（親）がコントロールできるものではないね。（中略）うん、だから、そういうことを考えようとも思わない。だって、考えてもムダだから、やっぱり考えはしない。（中略）やれるところまでやってくれればそれでいい。（A さん）

＜ MQ ＞
ちょうど今考えているところですね。子どもにとって、やっぱり「外」（近隣の都会）に出た方がいいって周りの友だちから勧められているので。（中略）知り合いはみんなあの学校はすごいって言っていますから。（中略）あと、地元中心にしたいとも思っています。もし、子どもを外に出すと、（子どもの）人脈が少なくなるのではないですか。心配しますね。（子どもが）地元にいれば、市内の民営中学校受験させた方がいいと思います。（B さん）

上記の語りでは、一見２人とも学校選択意識をもっているように思われるが、実際背後の考え方や行動に関しては顕著な差異が存在している。4.1 の項目の「教育期待」で分析したのと同様に、A さんは、「子ども次第」、「本人が」と子どもに重点をおいており、「コントロールできるものではない」、「考えようとも思わない」、「考えてもムダ」と関与しない方針が語られた。しかし、B さんは、「ちょうど今考えているところ」とすでに計画しており、「周りの友だちから勧められている」、「知り合いがみんな…言っている」と情報収集も始めている。このプロセスでは、B さんが上手に周囲の社会関係資本を活用していることが分かる。

さらに、最後の語りでは、前述に類似した「外に出すと…なる。…いれば…」といった表現があった。それは、B さんは各選択肢がもたらす利害も念頭においており、情報処理をしている。その時、「地元中心」志向を持つ理由は、「（子どもの）人脈」、つまり、子どもの将来のために役立つ社会関係資本の蓄積が挙げられた。このように、一貫して「させたい」といった心の望みに留まっている A さんと違って、B さんは自身の望みを確実に行動レベルに移行している。

4.4. 子どもとの関わり方

子どもとの関わり方には、さまざまな側面が存在している。今回のインタビューでは、２人の対象者から子どもがパソコンゲームに夢中になる事例が共通に言及されたため、以下では、A さんと B さんが語ってくれたパソコンゲームに対する関与の仕方を中心に比較する。

（子どもは）パソコンが今一番好きなものです。でも、家では遊ばせていない。うん、その一番の理由は、うち夫婦２人ともメガネだから。（中略）うちの子はもう近眼になっていますし。勉強でそうなったのではなく、パソコン（ゲーム）のせいだから。
（A さん）

この世代の子どもは、パソコンゲームに毒されたと思いますね。（中略）でも、（パソコンは）やっぱりいいものですね。使い方次第だけど。（中略）息子にはこう説明している。「母さんは、パソコンでゲームをするのに絶対反対しているわけではないよ。ほら、学校でもパソコンの授業があるでしょう。ただし、なぜパソコンの操作を勉強するのかを考えたことある？それは、これからの生活をもっと過ごしやすくできるし、もっと早く情報を手にすることできるからだよ。だから、すべてのことは、プラスの面もあれば、必ずマイナスの面もありますよ。」（中略）もちろん、時々はさせていますけど。週に1回2回ぐらいかな。（子どもが）私の知らないところで、こそこそやっているかもしれませんが。（B さん）

このように、子どもがパソコンゲームに夢中になることについて、2人とも「パソコンのせい」、「毒された」とマイナスの面で判断している。しかし、それへの関与に大きな差異がある。A さんからは、「メガネ」や「近眼」といった理由が挙げられ、子どもの健康面への配慮はうかがえるが、「パソコンのせいだから」とパソコンゲーム問題を拡大して、パソコンまでも完全にマイナスであると捉えている。関与する時は、「遊ばせていない」と禁止の態度を取っている[12]。しかし、B さんの語りに「使い方次第」、「プラスの面もあればマイナスの面もある」が出てきたように、彼女は完全の否定ではなく、その両面性を認識している。また、関与の際には、「絶対反対しているわけではない」と、心がけて子どもに「説明している」。つまり、彼女は子どもとのコミュニケーションを意識していることが分かる。これはいわゆる家族内の社会関係資本の豊かさの証拠といえよう。

また、B さんは説明する時に「早く情報を手にする」ことがパソコンのメリットとして挙げている。実際、インターネットを通じた社会関係資本の蓄積の可能性を指摘する研究（たとえば、稲葉 2007, p.111）があり、それは、4.2 の項目で検討した「地元中心」以外に、B さんが子どものために考えているもう1つの手段かもしれない。

4.5. 子どもの変化（B さんの語り）

これまでの分析は、社会関係資本による作用そのものに注目してきた。しかし、果たしてこの作用は子どもに有効な影響を与えるかどうかはまだ確定できていない。本節では、親からの影響を受けた後、子どもに見られる変化について検討する。この部分に関して、A さんの語りが不十分であるため、B さん1人のデータから見てみる。語りの内容は、民営中学校への受験準備対策として、子どもを複数のコース（塾）で学ばせたいと思う B さんの気持ちに対する子どもの反応である。

前は、いつもなんだかいやがっている感じでした。やっぱり彼自身からやりたいと思わせないと。（中略）いつもこうして話をしている。「みんながんばっているから、あなただけががんばらないと、落ちてしまうんじゃない？」そうすると、彼は納得する。（中略）そう、昨日は（息子から）「母さん、○○[13]民営中学校の試験を受けてみたいから、コースを増やしても大丈夫だよ」と本人からそう言われた。（B さん）

ここで語られたのは、子どもの気持ちを尊重することを心がけた接触（説明）が繰り返されている（「いつも」）なか、B さんの子どもは「いやがっている感じ」からやがて「納得」、そして「受けてみたい」、「増やしても大丈夫」といった一連の良い変化である。これは、良質なコミュニケーションによる豊かな社会関係資本が持続されたことによって、親の意識や期待が時間とともに子どもに内面化されていく過程を意味していると思われる。

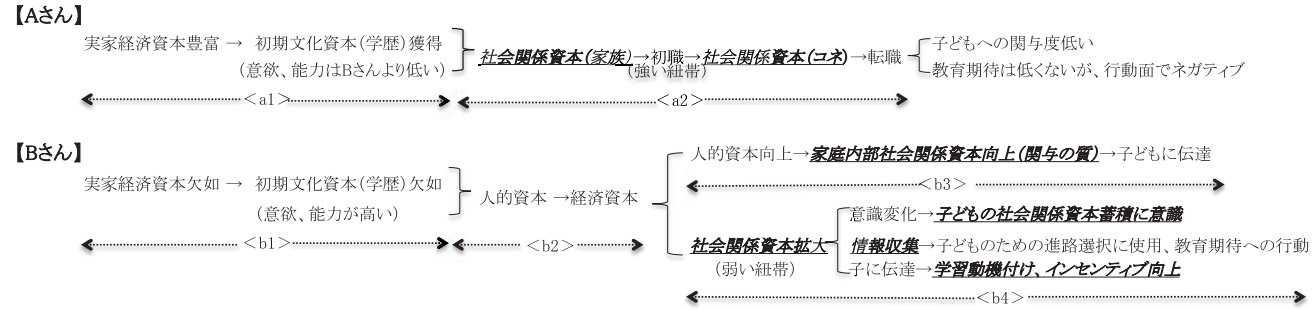
これまで見てきたとおり、A さんと比べ、B さんの語りでは、子どもとの良質な接し方を常に心がけている面が目立つ。しかし、こうした意識あるいは行動は高学歴階層の親に現れやすいものであるが、学歴の低い B さんがなぜ持つようになったのだろうか。この点については、B さんは、昔は自分も「一方的に押し付ける」タイプの親と同じであったことを認めている。B さん自身の変化は、「今参加している社交グループ」の影響を受けたからと説明されている。そのメンバーたちは「みんな文化レベル（階層）の高い人」である。それは Bourdieu の議論にある「上流階級に所属→人脈形成→階級文化を習得→子ども」といった経路のリアリティの現れである。

5. まとめと考察

これまでの分析を踏まえ、社会関係資本に関わる親から子どもへの作用経路の可能性および階層間の差異を図1で示す。以下は図1を中心に分析結果についてまとめ、考察する。

まず、出身家庭の経済資本に恵まれて、A さんは自身の学歴獲得競争に成功した（a1）。その後、家族や親戚のコネによって、職業獲得場面においても有利であった（a2）。しかし、それは必ずしも次世代への高い教育関心につながっているとはいえない。つまり、A さんの事例から、制度化された文化資本が子どもに寄与する効果には限界があ

図1―社会関係資本が作用する経路のまとめ



注:社会関係資本が作用する箇所は斜体と太字で表記する。
Aさんから観察された経路を a1、a2で示す。Bさんから観察されたのをb1、b2、b3で示す。

ることがうかがえる。また、家族のコネなどが意味する社会関係資本（「強い紐帯」）は、就職場面に有利かもしれない（たとえば、渡辺 1991）が、教育場面（子どもが利用できる他の資源に転換）では、少なくとも本稿で扱ったデータからは同様の効果は観察できなかった。

一方、出身家庭の経済資本が欠如したことで、初期の学歴獲得競争に不利な立場に置かれた（b1）B さんは、自身の高いアスピレーションと能力で人的資本を習得し、経済資本を獲得した（b2）。この経済資本を活用することで、人的資本をさらに向上させ、同時に子どもとの接触の質も高めた。これは、家庭内部の社会関係資本を通じて、子どもが親の人的資本を利用できる可能性を示唆するものである（b3）。また、経済資本は事業関係などの社会関係資本（=「弱い紐帯」（Granovetter 1973 = 2006））の拡大効果ももたらした。それによって、親の教育意識に良好な変化が現れ、教育期待に向けた行動をより実現しやすい方向へ導いたことが読み取れる。最終的にこの作用を受けた子どもにも良い変化が観察される結果となる（b4）。こうした B さんの事例が示唆しているのは、①初期の家庭的背景による不利な状況は、本人の教育アスピレーションや能力によって補うことが可能であることと、②子どもとの関わり、あるいは「弱い紐帯」の意味においての社会関係資本は、子どもの教育過程において大きな効果が顕在･潜在している、という 2 点である。

上記の事例を比較してみると、2 人の親が子どもであった時代においては、本人の教育アスピレーションや能力によって、家庭の資源状況がもたらした不平等を解消することが可能であった。しかし、2 人が親になった現在において、子どもの教育アスピレーションは、その一部が親の社会関係資本によって影響されてしまうことが分かる。そして、この重要な効果を発揮できる社会関係資本とは、「強い紐帯」が意味する家族のコネより、「弱い紐帯」が代表している家族外の人間関係や親子の間にある質の高い接触の仕方、といったものである。しかし、その両方の形成は、基盤にある経済資本の量にかかっている。すなわち、経済資本による直接的な作用、他の資本を通じた迂回的な作用があったからこそ、鍵となる社会関係資本の醸成、維持、拡大、相続が可能になる。これは、まさに平塚（2006, p.74）が指摘した「社会関係資本が経済資本・文化資本の従属変数化しつつある状況」を実証したものである。ここでも、「ペアレントクラシー」[14]（Brown 1997）の問題が絡んでいる。

以上、本稿は親の所有する資本が子どもに作用する経路の可能性を探る視点から、先行研究で提起された社会関係資本概念に関するいくつかの側面を整理しつつ、2 人の母親による事例を検討してきた。その結果、社会関係資本は親が所有する重要な一資源として、子どもの教育過程における重要な効果を明らかにし、それが経済的な格差を根源にした社会的不平等を助長することにつながる可能性があることを考察した。

最後に、本稿の限界と今後の課題について述べたい。①本稿の聞き取り内容には不足している部分がある。とくに、A さんについては、子どもの変化に関する情報が把握できなかったため、B さんの記述だけに留まっている。適切な結論を引き出すために、今後は A さんに対する補足的な情報収集を実施しなければならない。②本稿は、あくまでも 2 人の対象者による語りであり、両者とも中間レベル以上の階層に偏っている。よって、今後は、同階層の対象者のほかに、今回扱わなかった下位階層の対象者も視野に入れつつ、更なるデータ収集を行いたい。③本稿は、母親のみに注目しているという限界もある。より豊かなケースを検討にするために、今後は子ども自身あるいは、父親や塾の教師などの第三者から、事実を裏付けるようなより客観的な情報収集も念頭に入れて研究を深めていきたい。

（注）

1　本稿では、石田（2004, pp.71-72）があげた理由を採用して、

Social Capital に「社会関係資本」という訳語をあてる。石田によれば、①未だに定訳がないこと、②直訳した用語は自然環境、インフレ設備等を示す「社会的共通資本」と混同する恐れがあること、③ Social Capital は人びとや組織の間の関係を扱うものであること、といった 3 点が理由である。そのため、分析に引用するほかの文献で登場した訳語（Coleman（1990 = 2004）は「社会的資本」、Lin（2001 = 2008）は「ソーシャル・キャピタル」、中国語の文献である樊（2004）は「社会資本」）をすべて「社会関係資本」に統一する。

2　この点については、荒牧（2010）の整理が詳しい。

3　教育に関しては、例えば、志水（2010）、新城（2010）などがある。

4　稲葉（2007，pp.97-98）の紹介は、デヴィッド・ハルパーンが『ソーシャル・キャピタル』のレビューで引用したものである。

5　ほかには、義務と期待、規範と実効性のある制裁、支配関係、意図的組織といった 4 つがある。

6　同じ該当地域で質問紙調査を実施した馬（2010）では、データ処理の際に、1 ヶ月の世帯所得が 3,000 元未満の場合を低所得層、3,000 元から 5,000 元未満の場合を中間所得層、5,000 元以上の場合を高所得層としている。実際、地域平均の所得水準から見れば、当該市都市部 1 人あたりの平均可処分所得は 2574.5 元（同年全国水準 = 1592.4 元）で、農村部 1 人あたりの平均所得は約 1292.8 元（同年全国水準 = 493.2 元）である（2010 年データ）。ただし、政府が公表したデータは 1 人あたりのものであるのに対し、本稿は馬（2010）と同様に、世帯所得を使用している点に留意してほしい。（中華人民共和国国家統計局 http://www.stats.gov.cn.，慈溪市統計 http://tjj.cixi.gov.cn/ より，2011.8.22 閲覧）。

7　注 6 を参照のこと。

8　学歴、職業、所得のどちらから見ても、A さんは該当地域の中間層に位置づけられるといえる。それに対して、B さんの場合、特に所得から見れば、やや特殊だと思われるかもしれない。しかし、先述した通り、該当地域に自営業者が多く集中している点が大きな特徴であるため、その意味で、B さんの事例は成功した自営業者のグループを代表できる 1 ケースともいえる。

一方、社会関係資本に対する意識の点では、A さんが当該地域における「中間的」なものであるのに対し、B さんの意識は高いといえる。よって、本稿で扱う両者の事例は、ある程度の典型性を持つといえるだろう。

9　A さんの語りでは「培訓班」と呼んでいたが、当時、高校受験、大学受験に失敗して浪人になった人のために開設された教育機関を指している。現在中国で小中学生に向ける補習や中学校受験用の「培訓班」（学習塾に相当）のこととは異なる。実際現在は中国語で「高複班」や「復読班」とも呼ばれている。そこでの勉強は学校とほとんど違いはない。学費を払う必要がある。

10　たとえば、期待する「タテの学歴」に関する階層差は柴野ほか（1999）で、「ヨコの学歴」に関するのは馬（2010）が挙げられる。

11　ただし、「学習塾＝自分の職場＝子どもを預かる場所」といった経緯からいえば、ここで扱った A さんの事例はやや特殊である。

12　本文でのデータ提示は省略するが、実際通塾させた効果について話をする時、A さんは塾ではパソコンがないから、子どもが宿題に集中できることに満足していた。

13　具体的な学校名になるので、○○で表記する。

14　イギリスの社会学者ブラウンが現代社会におけるイデオロギーの変質を指摘した際に提出した言葉である。耳塚（2007，p.33）の解釈によれば、それはつまり、選抜が業績ではなく、富を背景とした親の願望が形づくる選択次第であることを意味している。

（文献）

荒牧草平，2010，「教育達成における階層差発生過程のモデル化」『九州大学大学院教育学研究紀要』，第 13 号（通巻第 56 集），pp.1 － 15.

Bourdieu,P., 1980, “Le capital social: notes provisoires”, *Acts*.（= 1986，福井憲彦訳，「『社会関係資本』とは何か－暫定的ノート」『アクト』，pp.30-36）.

黄順姫，2007，『同窓会の社会学—学校の身体文化・信頼・ネットワーク』世界思想社.

樊平，2004，「社会流動与社会資本－当代中国社会階層分化的路経分析」『江蘇社会科学』第 1 期，pp.28-35.

Granovetter,M.S.，1973，“The Strength of Weak Ties”, *American Journal of Sociology,*（78），pp.1360-1380.（= 2006，大岡栄美訳，「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，pp.123-155.）

平塚眞樹，2006，「移行システム分解過程における能力観の転換と社会関係資本－『質の高い教育』の平等な保障をどう構想するか？－」『教育学研究』第 73 巻第 4 号，pp.69-80.

稲葉陽二，2007，『ソーシャル・キャピタル—－「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題』，生産性出版.

石田光規，2004，「社会関係資本（Social Capital）－その理論的背景と研究視角－」『社会学論考』第 25 号，pp.51-81.

Coleman, J.S.，1988，“Social capital in the Creation of Human Capital”, *American Journal of Sociology*,（94），pp.S95-S120.（= 2006，金光淳訳，「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，pp.205—241）.

————，1990，“Foundations of Social Theory”，Belknap Press of Harvard University Press.（= 2004, 久慈利武監訳『社会学の思想④　コールマン　社会理論の基礎（上）』青木書店）.

馬芳芳，2010，「親の教育期待に関する社会学的研究－中国浙江省 3 中学校の保護者調査から—」『人間文化創成科学論叢』第 13 巻，pp.279 － 288.

三隅一人，2009，「社会関係資本と階層研究－原理問題としての機会の平等再考－」『社会学評論』第 59 巻第 4 号，pp.716 － 733.

耳塚寛明，2007，「小学校学力格差に挑む　だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第 80 集，pp.23-39.

宮島喬，1999，『文化と不平等』有斐閣.

Nan Lin，2001，“Social Capital: A Theory of Social Structure and Action”, Cambridge University Press.（= 2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳，『ソーシャル・キャピタル－社会構造と行為の理論—』ミネルヴァ書房）.

Brown,P.，1997，“The 'Third Wave': Education and the Ideology of Parentocracy”, edited by A.H.Halsey, Hugh Lauder, Phillip

Brown, and Amy Stuart Wells, *Education Culture, Economy, and Society*, Oxford University Press, pp.393 − 407.

Merriam,S.B., 1998, “Qualitative Research and Case Study Applications in Education”, Jossey-Bass.（= 2004，堀薫夫・久保真人・鳴島美弥訳，『質的調査法入門－教育における調査法とケース・スタディ－』ミネルヴァ書房）.

坂田正三, 2001,「社会関係資本と開発—議論の系譜—」佐藤寛編，『援助と社会関係資本－ソーシャル・キャピタル論の可能性』アジア経済研究所，pp.11-33.

志水宏吉，2005,『学力を育てる』，岩波書店.

————，2010,「教育資本について」山内乾杯史・原清治著『論集　日本の学力問題＜下巻＞学力研究の最前線』，日本図書センター，pp.212-230.

柴野昌山・前田耕司・天童睦子・飯嶋香織，1999,「社会階層と教育期待に関する実証的研究—家族の変化との関連で－」『早稲田教育評論』第 13 巻第 1 号，pp.97-133.

新城優子，2010,「子どもの教育達成プロセスに関する理論的検討－社会関係資本の視点から－」『ソシオロゴス』No.34, pp.85-103.

渡辺深，1991,「転職—転職結果に及ぼすネットワークの効果－」『社会学評論』165，pp.2-16.

Effect of Parental Social Capital on the Education for Children : Interview with Two Chinese Mothers from Different Social Classes

Fangfang MA
(Human Developmental Sciences)

The purpose of this study was to clarify the ways in which parental social capital affects the education for their children and how the social class affects the approach that a family takes to educate their children in China. The study was performed by a qualitative method. On the basis of interviews with two Chinese mothers from different social classes and the analysis of typical cases discussed during interviews, the following conclusions can be drawn:

Children do not always benefit from their parents even if their parents own a high level of academic qualification. Furthermore, the social capital brought by parents' "strong ties" is very difficult to use to help their children during the family education. On the other hand, the education aspiration for learning and learning ability of the interviewees can remedy inequities stemming from family background during a child's upbringing. At the same time, intimate communications between parents and their children can bring a positive effect. Enthusiasm for education is affected by the parents' social capital, which mainly consists of "weak ties" brought by the parents' social circle. Furthermore, enthusiasm for learning is encouraged by intimate communications between parents and children. Moreover, according to the interviewees, the social capital mentioned above seems to be related to the level of the family's economic capital.

In conclusion, the data gathered from interviews suggest that the effect of parents' social capital on their children accelerates social inequality to some extent in China today.

Keywords: social capital, Chinese mothers, communication, social inequality, education aspiration